



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

25年を振り返って

KKR 北陸病院 放射線科 宇野 幸子

H3年、金沢大学を卒業し、早いもので卒後25年目になります。

途中子育てなどで7年も空白の時期があるので、実際に働いたのは、もう少し短いですが。

専門は放射線診断です。一昨年前までは、放射線診断専門医が4人いる大きな病院に勤務し、昨年4月、はじめて一人医長として北陸病院に参りました。やはり病院の規模によって、要求される仕事内容は異なり、最初は戸惑いましたが、徐々に慣れてきたと思います。

他科もそうなのかもしれませんが、放射線科の場合は、25年前とくらべ、驚くほど仕事環境が変わりました。一番は、フィルムレス、モニター診断の時代になった事です。読影レポートも、紙に手書きの時代から、レポートシステムにかわり、一日中パソコンに向かい、モニター画像を見て入力するという生活になりました。おかげで入力だけは、平均よりもかなり速い方だと思います。

CT、MRIも高性能になり、放射線科医の仕事は増加し続けています。MRIの新しい撮像方法がどんどんと出てきて大変です。ただ、電子カルテ、PACSの整備が進む中、ティーチングフィルムが簡単にみられるようになり、また非常に珍しい症例の画像も、Google画像で検索できる時代になってきて、便利になりました。

IT化が進み、今年夏の放射線科の全国的なセミナーでは、ついに紙の冊子はなくなり、「参加費を払うとシリアルナンバーが送られてきて、全員、それでシラバスが見られるデバイスをもって参加する」という形になってしまいました。いまだにガラケーを使っている私としては、「もう、おばちゃんは来るなって事?」と思いましたが、iPadで乗り切りました。学会発表も、放射線科全国総会になると、スライドだけでなく、口頭も英語になってきていて、本当についていけなくなりそうです。

3人いる子供たちも、2人は成人しました。子供たちが小さかったころは大変でしたが、私の場合は、実母が近くにいて本当に助かりました。もちろん、職場の周りの先生方にもご迷惑をおかけし、この場をかりてお礼申し上げます。忙しかったですが、その時はまだ自分も幾分若く、ひたすら毎日仕事と家庭をこなし、その時が一番放射線科医としては勉強になりました。家に訪ねてきた母が、「あんたたちは、生活しているというよりは、棲息しているって感じやね」と言われたのを覚えています。一応、毎朝のお弁当作りは続けていて、長男の中1の時から現在まで10年頑張ってます。

今年の夏、高校の30周年の同窓会がありました。

もう亡くなられた方もいて、改めて、健康が一番大事だと痛感しました。かと思えば、他の職種で光り輝い

ている人もいて、「医者になってなかったら、また別の人生もあったかも？」などとも思ってしまいました。それもあって、今進路で悩んでいる高2の娘には、何の助言もしてやれず、自分の納得できる職なり学部なりが決まると良いなと願うばかりです。

もう目前にせまった50代。どのようなスタンスで仕事をしていこうか。子育てはあと数年で一区切りだけど、親はだんだん弱ってきているし。仕事以外の趣味も持ちたいし（実はこっそりピアノを習ってますが）などと考えながら、できれば、早く孫の顔が見たい、ますます高齢化社会に向かう中、若い人が働くためにも、孫の世話は手伝わなくては、と思う今日この頃です。